

文部  
作3

文部科学大臣賞

# 祖父から学んだこと

高島町立第二中学校三年

小林 千紗



私は、小学校二年生のときから七年間ずっと、祖父母の家で朝ご飯を食べています。祖父母との朝ご飯は、カレーライス、煮物、おひたし等ごく普通のものでしたが、その朝食を食べながら私は祖父から多くの事を学びました。その中で心に残っている事があります。

それは、ご飯の食べ方についてです。祖父母の家に行き始めた頃、私はテレビを見ながらご飯を食べ、食べ終わるとすぐ

「ごちそうさま。」

とだけ言って、学校に行くという生活を送っていました。そんなある日、祖父が私の見ているテレビを急に消してしまつたのです。私は驚いて祖父の方を見ました。すると「おばあちゃんが早起きして、心を込めて作ったご飯なんだから、ちゃんとテーブルの方を見て、味わって食べなさい。それから、明日からは、もっと早く来て、余裕を

もって食べなさい。」

と、言いました。その頃の私はまだ小さくて祖父の言つた事は半分くらいしか理解できませんでしたが、次の日から言われた通り早く行つて、テーブルの方を向いて食べるようにしました。すると、その日その日で「今日の祖父はよく話すな。何かいい事があつたのかな」とか「今日は眠そうだな」など、いろいろな事が分かるようになり、前よりも会話をたくさんするようになりました。さらに、時間に余裕がある分、祖母が作ってくれたご飯を味わって食えることができるようになりました。毎日朝早くからご飯を作ってくれてありがとう、と改めて思うことができるようになったのです。

次に心に残つたことといえば、私が小学校四年生ごろから六年生ごろまで毎朝、朝食の前に行つた朗読です。と言つても読むのは祖父の方で、ボケ防止を目的として始めた取り組みでした。祖父は、本や新聞を毎朝五分間、私に読んで聞かせてくれました。祖母も朝食の準備が終わると、私と一緒に聞きました。そして、ご飯を食べながら、聞いていて思つた事などを話したり、祖母が聞けなかった日は、私が祖母にもう一度話して教えたりしました。その頃の私はあまり人と話すことが好きではありませんでした。したが、朝食のときに読み聞かせについて祖父母と話すことはとても好きでした。たぶん祖父は私が話すきっかけを

作ることも目的としていたのだと思います。この朗読についてのおしゃべりをしながらの朝ご飯のおかげで、今の私は、あの頃よりちよっぴりおしゃべりになりました。この祖父母との食事を通して私は、ご飯を作ってくれた人への感謝の気持ちを決して忘れてはいけないということ学びました。また、楽しく会話をしながら食べると、とても幸せな気持ちになれるということ強く学びました。

祖父は去年、他界してしまい、今は、祖母と二人で朝ご飯を食べています。祖母は、祖父がいなくなってから、毎朝変わらず、早く起きて、心の込もったご飯を作り、私が行くのを待っていてくれます。そして、たくさん話しかけてくれます。ですから、毎朝おいしいご飯を楽しく食べることが出来ます。私も、してもらっているばかりではなく、いつか、自分で作ったご飯を、祖母に食べさせて、祖父にできなかつた分も恩返ししたいと思っています。

これから先、高校に行ったり、大学に行ったり、社会に出たりして、いろいろな人とご飯を食べる機会が増えると思います。どんなときでも、どんなところでも、祖父が教えてくれた感謝する心と、楽しく食べることが出来る「会話」という秘訣を忘れずに、ご飯をおいしく食べていきたいです。



■全国優秀賞・山形県知事賞■

ごはんをたいせつにたべる

山形市立千歳小学校二年 五十嵐まりあ

このまえ、みやぎのたがじょうのおばあちゃんのうちにいきました。くるまで、とうぶどうろをはしっていたとき、いままでひろかったたんぼが、いっぱいのがれきにうまっているのがみえました。わたしは、とてもびっくりして、こめをそだてているひとは、だいじにそだてていたこめがつかれなくなつて、かなしいきもちだとおもいました。

わたしも、なつやすみちゆうに、あさがおをそだてていて、まいにちみずをあげたり、かんさつをしたりしていたのに、かれそうになってきてかなしかつたので、おこめをつくっているひとはもっとかなしいおもいをしてるんだとおもいました。

わたしは、いままでは、ごはんをしょっちゆうのこし

ていました。でも、三がつのじしんのあと、ていでんになつたり、おこめがおみせにうっていなくなつたりして、しばらくごはんがたべられませんでした。そしてひさしぶりにあたたかいごはんをたべたとき、そのごはんはともおいしかったです。わたしはこのときのきもちをわすれたくありません。

つなみでたくさんのたんぼが、がれきにうまつてしまったので、たいせつにごはんをたべないと、おこめがなくなつてしまつて、またごはんがたべられなくなつてしまうかもしれません。これから、ちゃんにごはんがのこらないように、ちゃんと、ごはんをのこさずたいせつにたべます。

こんど、おばあちゃんのうちにいくときには、また、まえみたいひろいたんぼにもどつてるとうれしいなとおもいました。

## ■山形県農業協同組合中央会会長賞■

# お米つてすごいな

鶴岡市立朝日大泉小学校二年 大滝 楓人

ぼくのひいばあちゃんは九十さいです。ぼくの家で作ったお米でいろいろなものを作ってくれます。ささまき、とちあられ、かたまち、せきはん、ぼたまち、おもち、ごもくごはんなどをよく作ってくれます。作っては、しんせきやおきやくさんにあげてよろこんでもらっています。作っているときのひいばあちゃんのかおは、たのしそうです。はりきっているひいおばあちゃんが大すきです。ぼくが一ばん大すきなものは、せきはんです。ひいおばあちゃんにどうやって作るのと聞いたたら、「もち米をといで、あずきをたっぷりの水でゆでたつゆを一ばん米につけておいて、よく水をきってからふかし、そのあと、大きい入れものにかけて、水ときけをよくまぜてからふかしなおすとしなこくなるよ。」

と、教えてくれました。ぼくはたいへんだなあとおもいました。おまつりの時、ふかしがまを見たら、三だんくらいあつてびっくりしました。多いときは、五しようもふかすそうです。たくさんのお米を大きなふかしがまで作るからおいしいのかなあとおもいました。

ひいばあちゃんの作ってくれるものは、なんでもおいしいし、じょうずでじまんひいばあちゃんです。

学校からかえつてくるとおなかぺこぺこなので、三人でおにぎりを作ります。ひいばあちゃんが、

「せいや、ふう人、えっぺ食べて大きくなれよ。」と、言われた時、

「うん、いっぱい食べて大きくなるよ。」と、言うときひいおばあちゃんは、にっこり。

ぼくは、白いお米がいろいろな食べものにへんしんするなんて、すごいんだなあと思いました。ひいばあちゃんのように、ぼくのじまんです。

■山形県知事賞■

大好きなじいちゃんとお米

天童市立長岡小学校五年 土門 匠

ぼくは、お米が大好きです。毎日三食ごはんを食べた  
いごはん派です。中でも一番の好物は、たきたてほかほ  
かのごはんです。白くかがやいたツヤツヤの米つぶは、  
一口ほおぼると口の中でおどり、二口ほおぼると、ジュ  
ワーっとあま味がにじみでてくるように感じます。

どうしてこんなにごはんが好きなのでしょうか。それは、  
きつとお米作りの大変さを身近かで見ているからだと思  
います。

ぼくのじいちゃんは米作り農家です。農家の人たちは  
「おいしくなあれ。」と心をこめて、お米を作っている  
ことをじいちゃんから聞いています。そして、田おこし  
から二百日間もの長い間、毎日米作り一色です。

ぼくは、四月上旬の種まきからお手伝いをします。温  
泉につけた種もみを苗箱に植えつけていきます。千八百  
枚もの苗箱を機械に差しこんでいくのが、ぼくの仕事で

す。力もいらぬし、はげしい運動もないけれど、とて  
も根気のいる仕事です。じいちゃんは、もくもくと種の  
具合や機械の調子を確かめながら汗を流しています。そ  
んなじいちゃんはすごいと思います。

そして、苗が十三センチぐらいに育ったころのゴール  
デンウィークが田植えです。毎日、朝五時から田んぼに  
出て、田植えをします。ぼくは、主に、苗をハウスから  
出して田んぼへ運ぶ仕事をします。ハウスの中はまるで  
サウナのようにむし暑いのです。育った苗は重さもあるた  
め、とてもきつい仕事です。時折、いやになって逃げだ  
したくなります。そして、思わずなみだがこぼれそうに  
なりましたが、ぐっとこらえてがまんしました。なぜな  
ら、そのなみだと汗がおいしいごはんになるからです。

じいちゃんは、米作りのプロなので細かいこともきび  
しいです。いつもはやさしいじいちゃんですが、この時  
ばかりはきびしいです。苗をたおしたり、ざつにあつかっ  
たりすると、とてもこわいです。だから田植え中は、つ  
らい事もいっぱいあります。

田植えがおわると毎日、水の管理や稲のじょうたいを  
見守り、朝から晩まで、田んぼで仕事をしているじいちゃ  
んです。本当に汗のかわく時がありません。そのおかげ

で、本当に、本当においしいお米が出来上がります。

ぼくが毎日食べているお米は、ぼくとじいちゃんか、汗水たらして作ったお米なのでとてもおいしいです。そして、そのお米には、じいちゃんの愛情がぎゅっとなつています。だからお米が大好きです。今日もたきたてほかほかのごはんをいただきます。ごはんは、ぼくの力の源です。



## ■山形県農業協同組合中央会会長賞■

### お米を大切に

鶴岡市立西郷小学校五年 伊藤 琉圭

「ざくっ、ざくっ。」

ぼくは今、稲刈りをしている。金色に実った稲をかま刈っていくのだ。稲作指導員のお父さんや大人の人達の「一本一本が太いなあ。」

という声が聞こえる。うれしくてかまを持つ手に力が入る。

ぼくの学校では、五年生になると毎年、学校田で米作りをしている。となりの湯野浜小学校と加茂小学校の友達も一緒に活動する。四ヶ月前、田植えがあつた。天気は晴れ、気温二十三度の最高の天気だった。全員がどろだらけ、汗だくになりながら、一本一本ていねいに植えていった。二十センチほどの高さの苗が田のはじからはじまてびっしりになった。水が張られ、まっすぐに植えられたぼく達の苗はとでもりっぱで頼もしく、ほこらしい気持ちになった。心の中で「大きく育てよ。」と話

しかけた。

それから、ぼく達は夏休み前、地区にある善宝寺で修行体験学習をした。座ぜんをしたり、早朝のそうじをしたりしたが、一番に残ったのは、食事の時間だ。おぜんには、ご飯の他のほうれん草、にんじん、きゅうりなど畑でとれた野菜が並んでいた。少し質素な感じがしたが食べたらとてもおいしかった。そして、食事ではいろいろな作法があった。ご飯をもらう時は、正座で両手でもらうこと、食べるときには、おわんを頭の上上げる、おかわりするときには全部食べることなどだ。ぼくは作法を守ることだけで大変だったが、お坊さんは、

「お米一つぶでも大切に思う気持ちをこめましょう。」

と話してくれた。ぼくはうちの人からも、いつも同じことを言われるのを思い出し、よくかんで食べた。また、食事中に、

「たくわんを一枚残しておいてください。洗うので。」

と言われた。どうするのかと思っていたら食事の最後にお坊さんが茶わんにお湯を注いだ。

「たくわんで茶わんを洗います。」

ぼくは、ご飯茶わん、お汁茶わん、お皿とお湯を順番に移し、最後に全部飲みほした。いろんな味がしたが、茶

わんはとてもきれいになった。ぼくは「昔から、寺でも家でもお米や野菜を大切に食べてきたんだな。」と改めて思った。

ぼくの家でも、米を作っている。お父さんが田植えから毎日ていねいに田んぼの世話をしている。いつも見ているだけだったが、今年、自分が米作りをしてみても、苗を大きくするまでの、大変さや、育っていくときのうれしさ、そして収穫する喜びを体験することができた。これから、脱こくやふくろづめの仕事をするが、「西郷米」のラベルを張るところまでみんなががんばっていきたいと思う。



## ■山形県知事賞■

### 父に感謝！

山形市立第六中学校二年 早川 舞乃

私がお米に興味を持ったのは、小学校四年生の時だった。それまで会社員として働いていた父が、農業を営む仕事に転職することになったのだ。

「お父さんは、今度農家になるの。」

母の言葉は衝撃的だった。私は、農業という職業についてほとんど何も知らなかった。だからすぐに、

「ヘンだよ！」

と言つて、父の転職に反対した。何よりも、会社で部長を務めていた父は、私の誇りだったからだ。

しかし、私の思いとは裏腹に、父は農業の仕事を開始することになった。

「米を作るということは、日本人にとって本当に大切なことなんだ。誰もが食べておいしく、安心できる米を自分の手で作ってみたくなったんだ。」

父の思いに家族みんなが応援することに決めた。それまでは、何も思わず、当たり前のようにご飯を食べていた私にとって、お米という存在がぐっと近くなった気がした。

しかし、農家の仕事がそう簡単ではないことは、私も次第にわかってきた。父は田んぼを借り、他の農業の人達と協力して作業をする組合の一員として働いていた。最初の頃は、私も妹も父の田んぼに行き、自分ができる仕事を手伝った。

田んぼの水の量は、暑さや雨に左右されるし、用水路の水を止めたり、出したりの調整も必要だ。父が朝早く様子を見に田んぼへ出かけたり、突然の雨で水を止めに行ったりすることはよくあった。また、父は組合の機械を借りて作業をしており、自分の家だけではなく組合の人達の田んぼをみんなで手伝い、協力して仕事をしている。忙しい時期には、朝の三時頃に農作業に出て行く。そんな努力があつて、やつとおいしいお米ができるのだということを知った。

父達の農作業の邪魔をするのは、天候だけではない。害虫であるカメムシが発生すると、稲の栄養を吸い取り、米を黒くしてしまう。そうなると出荷はもちろん、食べることもできない。害虫の発生を抑えるための消毒も、父の仕事だ。良質なお米を作るためには、そうした様々な手のかかる仕事をきちんとかなしていくことが肝心、と父は言う。

十数年前、冷夏で日本の米が取れない年があつた。米が不足し、日本はやむを得ずタイから米を輸入し、「タイ米」を食べることになった。「タイ米は細長くて、パ

ラバラして、冷めるとまずかったの。」と母。タイ米のおかげで、日本の古米や古々米などが買い占められ、すぐく値上がりしたのだという。このことがあって、日本の米の安全性やおいしさが見直され、日本人はお米を大切にしてお米を食べるようになったと父が教えてくれた。

今年は、東北の米農家にとって大変な年となった。原発による放射能汚染の怖れや風評被害。そして、大型台風の接近―。

「父の田んぼや米が汚染されていたら…。」

ドキドキしたが、山形の検査は影響なし！

「米が安全だとわかって、本当に良かった。」

無事実りの秋を迎えた父の喜びが、そのまま米作りの人すべての喜びであってほしい。

その昔、中国から伝えられた稲作を、私達日本人の祖先は大切に受け継いできた。昔は農業機械や消毒の智恵はなかったかもしれない。しかし、「安心して食べられるおいしいお米を作ろう」という気持ちは、ずっと変わらず伝えられてきたと思う。「お米」は、私達日本人にとって、なくてはならない大切な主食なのだ。

毎日安心しておいしいお米を食べられることは、本当に幸せなことだ。私は、苦労しながらお米を作っている父に感謝したい。そして、農業という大切な仕事を選んだ父を、私は心から誇りに思っている。

## ■山形県農業協同組合中央会会長賞■

### ご飯の力

鶴岡市立朝日中学校二年 阿部 咲輝

「今日の晩ご飯は何？」

家に帰るとまず最初に口から出る言葉です。部活動でくたくたになって帰る一日の終わりには、いつもおなかが減って、ご飯のパワーをもらわないと倒れそうになります。そんな僕に、母は「今日は肉と野菜の炒め物と夏野菜のグラタン。」と、楽しそうな声で答えてくれます。帰りが遅くなっても必ず待っていてくれるし、疲れている日は、「おいしいよ。」と言う元気もないくらいにのぼくに、「おいしい？」と聞いてくれる優しい母です。母が作るおかずと、家の田んぼで取れた米。これが毎日の力の源です。

ぼくの家は専業農家ではありませんが、米を作っています。田植えは毎年家族総出でやる仕事で、手伝うのは当たり前でした。当たり前のようにやっている仕事ですが、ぼくの家では、魂を込めて育てていると自信を持って言うことができます。そう思うきっかけは、ある日の祖母の姿でした。祖母は苗に向かって「おいしくなれよ。」と声をかけているのです。不思議に思い、聞いてみまし

た。「ばあちゃん、米や野菜は言葉わがんねじゃん。んだなさ、なんでしゃべりながら仕事してんなや？」すると祖母は、「米も野菜も言葉わがるぜ。野菜は人の気持ちの入れ方次第で、大きく育つが小さくなるが、おいしくなるがならねが、決まってくるんだよ。」と言うのです。「へえー。」と答えながらも、「野菜なんて人の言葉わがるわけねえや。」と思う気持ちがありました。

そして今年も田植えの季節がやってきました。祖父が「今年の苗の根はいいぞ。」とうれしそうに言います。そういえば去年も同じようなことを言っていたな、と思い、どうして毎年同じようなことを言っているのか、本当に今年の根はいいのかどうか聞いてみました。すると、「ほめると苗も元気に育つんだ。」という答えでした。驚いたことに、祖父も祖母も同じようなことを言っているのです。そこで僕はようやく納得できました。米や野菜は言葉はわからないかもしれないけれど、言葉で伝えようとする人の気持ちは分かるということです。今まではただ植えていただけの田植えでしたが、祖父と祖母の話聞いた今年、ぼくも「おいしくなれよ。」と苗に声をかけながら、気持ちを込めて田植えに参加しようと思ひ、田んぼに行きました。しかし、植えるだけでもつらいのに、気持ちを込めるのはとても大変です。うまくできたのか不安になっていると、祖母が、「ありがたい。今年も咲輝のおかげで楽しく作業できだっけ。」

と言ってくれました。「楽しくできだつてば？」と聞き返すと、「田植えは疲れるが、少しでも楽しみがあるぞ、疲れとれんなだよ。」と言ってくれました。楽しく話したり笑いあったりして、疲れを吹き飛ばしながら仕事を、昔の人の智慧なのかもしれない。米作りには、人と人とを結びつける力もある。とても大変な仕事ですが、その大変さを忘れるくらい、何が起きるかかわらないうれしい驚きもあります。そんな米作りが僕は大好きです。

春に植えた苗は、今では五十センチほどになりました。種の時から考えると、五十センチまでの道のりは、決して短いものではありません。小さい時は、苗の色が悪かったりして、家の人たちがどうしたらいいかと悩んでいる時もありました。しかし、日に日に育つ苗はともきれいに見えます。このまま順調に頭が垂れ下がり、いつばいの米が実ることを願って、今日も祖父は田んぼの見回りに行きます。きつと何か稲に話しかけながら歩いているのでしよう。声をかけ、愛情をかけられて育った米だからこそ、おいしいご飯となつて、毎日ぼくたちに力を与えてくれるのです。ご飯の力は育てる人の愛情。また来年も、気持ちを込めて田植えを手伝います。